

落 葉

山 本 榮 淳

向ける。聞き馴れない聲が時々交つてゐる。  
もう庭の一つ／＼が朗かな輝しい朝の日光を一ぱい浴びて躍動して見える。小鳥たちは一層てんでに夢中になつて歌つたり喋べつたりしてゐる。

私はドイツトそれを聞き入つてゐる。

私は、あの小鳥たちの言葉が解る様になりたいと思ふ心持が湧いて来る。そして身輕に庭へ飛び出して私の言葉で小鳥たちに交つて話しかけたい心持になつてくる。

掴む事の出来ないものに引つけられる様になつて私は机から離れて小鳥たちの鳴いてゐる庭に出て見る。

私の姿が恐しい青嶺のジャイアント(巨人)が不意と、のつそり其處に現れた様に見へたのであらう。賑かなコーラスが、ぱたりと止む。

おゝ……若し私が此處で聲を出したら、あの小さい者たちは野獸が吠えるその如くに驚き脅えるだらう。

私は一寸あてがはづれて再び部屋に入り机に向ふ。すこしすると今逃げて行つた小鳥たちである。少し離れた處ですぐ賑やかなコーラスを始める。ふと私は小鳥たちに相手にされない自分がおかしくなる。小鳥たちの聲はおらが朝を歌ひたてゝ止まない。

(1)

「カサリ、カサリ」

何の音だらうか？ 枝から寂しく地上に散つて行く落葉の音だ。物想ひに沈む秋の夕べに……。窓邊に佇んで庭を眺むれば、それは餘りにも寂しい秋の景色であり、あまりにも私に哀れさを訴へる秋である。限りなく澄んだあの大空も、これからはどんよりとした雪空になつてしまふのだ。大空に輝く星は變りなく光つて居るけれども、戸をたゞく風に散る木の葉は此の去りゆく秋を嘆くが如く私の耳に聞へて来る。こうして佇んでゐると何時の間にか郷里の思ひ出が湧き上つて来る。

あゝ、もう田舎は一面落葉が散り敷いてゐるであらう。秋の學校生活、それは田舎に生れた者のみが味ふものであらう。

日曜に紅葉した山へブドウ獲りに行つた時は楽しかつた。併し二度とそれもやつて来ない。學校から歸つて来ると皆んなで落葉拾ひに行つたり、枯れ果てた野に戦争ごっこに行つたり、親しい友人と共に紅葉した野に私達將來に就いて考へたり……そうした事が落葉を眺めてゐる私の目に幻の様に浮き上つて来る。舞ひ落ちる落葉。深い思ひに沈ませる落葉。落葉。善人は勿論の事、悪人迄も「カサリ／＼」と散る落葉の音を聞く時は純潔な心の持主となる事と私は信ずる。

(1)